

氏名	田村 元延		
学位の種類	博士（コーチング学）		
学位記番号	博乙第 3026 号		
学位授与年月	令和 4 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	小学校中学年の体づくり運動における授業方法に関する研究 - 大きなボールに乗る運動の幫助を用いた学習展開 -		
主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳
副査	筑波大学教授		長谷川 聖修
副査	筑波大学教授	博士（工学）	浅井 武
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	坂入 洋右

## 論文の内容の要旨

田村 元延 氏の博士学位論文は、小学校中学年の児童を対象に大きなボールに乗る運動の授業方法についてコーチング学的観点から検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章では、著者は研究の背景として、子どもの“からだのおかしさ”の問題を取り上げ、「動きの未習得」や「運動欲求の衰退」の問題を言及している。中でも、「転んでも手が出ない」とされる現在の子どもが抱える動きの問題に対処するには、日常生活で不安定な環境に身を置き、バランスをとる動きやバランスを崩して転ぶ動きの経験の重要性を説いている。著者は小学校体育の体づくり運動系の領域において、中学年で例示されている大きなボールを用いた運動教材に着目している。この用具特性として、体のバランスをとる動きに加え、バランスを崩して転ぶといった動きを誘発し、楽しく遊び感覚で学習に取り組めることにも注目している。関連する先行研究では、不安定な用具を活用してバランスを崩すことを促す実践や柔道の受け身を取り入れて転び方を学習する実践などが認められたが、実践例は少なく、バランス動作の習得や転倒動作から検討されていないことを明らかにしている。また、これまでの大きなボールを用いた指導方法は、1人で課題に取り組むものが主流であり、児童の安全確保や学習を促進させることに着目した実践は少なく、幫助を用いた指導方法を検討していく必要性が示されている。

そこで、本論文では著者は、体づくり運動の授業実践において、大きなボールの運動教材について幫助を取り入れた指導方法を構築することを目的として、次の 3 つの研究課題を設定している。

研究課題 I：1人で取り組む従来型の大きなボールの指導方法の実態について、ボール上での転倒実態

調査、バランス測定、授業の内省調査などから明らかにすること

研究課題Ⅱ：従来型の指導方法の改善点を明らかにし、幫助を取り入れた段階的な指導方法を考案すること

研究課題Ⅲ：考案した指導方法について、バランス能力の向上、安全性、授業評価などの観点から効果を検証すること

第2章（研究課題1）では、著者は従来型の指導方法の実態を明らかにするために、授業におけるボール上での転倒実態調査、バランス測定、授業の内省調査を検討している。転倒実態調査では、学習活動中に積極的にバランスを崩して多様に転倒する傾向を示し、中でも座位バランスでは、後方へ肩部から着床する危険な転倒事例を明らかにしている。また、ボール上でのバランス測定では、静的なバランス能力は向上するものの、動的なバランス能力の向上は認められないことを示している。さらに、形成的授業評価における「意欲・関心」次元の「楽しさの体験」項目や「学び方」次元の「自主的学習」項目の評価が高いことから、児童が楽しく学習に取り組んでいる傾向を明らかにしている。

第3章（研究課題2）では、著者は従来型の指導方法を改善するために、児童自らボール上での歯車動作の連動性や動き方を探る学習の促進を目指して、他者と協力する直接的幫助法や支柱とロープを使った間接的幫助法を新たに考案している。

第4章（研究課題3）では、著者は考案した指導方法による授業実践において、安全性、ボール上でのバランス能力、授業評価の観点から検討している。まず、学習時の転倒実態調査では、直接的に頭部や肩部から着床する危険な転倒場面は認められず、安全に学習できることを確認している。また、ボール上でのバランス測定から、授業実践を通じてボール上での静的及び動的なバランス能力が向上する傾向を示している。さらに、形成的授業評価では、「意欲・関心」次元の「楽しさの体験」項目が高い傾向を示し、児童が楽しく学習に取り組んでいることを明らかにしている。

全体の総括として、不安定な環境を作り出す大きなボールに乗る運動は、多様にバランスを崩して転ぶ状況を作り出し、楽しく学習に取り組める教材であることを示している。特に、重心位置の低い運動課題では、幫助を最小限に設定することで、児童は多様にバランスを崩して転ぶ学習を促進させ、数多く転んだ児童ほど動的なバランス能力の向上が認められることを明示している。また、重心位置の高い運動課題では、学習の導入段階で安全性に重点を置いた幫助による指導により、児童自ら危険な転倒を回避して学習に取り組めることを明らかにしている。このことは、児童自ら試行錯誤しながら課題を解決する深い学びの実現に繋がる可能性を示している。

こうした本論文の知見は、「転んでも手がでない」という動きの未習得を抱える子どもに対して、不安定な環境に身を置き、他者と協力しながら、多様にバランスを崩して転ぶ中で自ら動き方を学ぶ重要性を明らかにしている。また、運動欲求の衰退が指摘される子どもにとって、不安定な環境の中でバランスを崩して転ぶイリンクスの経験は、子ども自らが動き出す教材としての可能性を示唆している。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、深刻な子どもの実態への対応として「大きなボール」に着目し、安全で効果的な指導方法を新たな観点で考案し、これを小学校中学年体づくり運動の授業実践を通じて検証している。そのため、従来の指導方法における問題点を洗い出し、「幫助」という観点から新たな指導方法を考案したことは、児童が安全に楽しく取り組む体づくり運動の指導方法の構築に大きく貢献するものである。以上のことから、本論文はコーチング学として独創性に富む有用な研究と評価できる。

令和3年12月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。